

- * 「ポンテオ・ピラトの時苦しみを受け」と使徒信条に名前が刻まれているポンテオ・ピラトは紀元26~36年にユダヤの総督であったことがはっきりしている。それゆえ、主イエスの十字架が歴史上の事実であったことを証明される。
- * 「あなたはユダヤ人の王ですか」「あなたは何をしたのか」と尋問するが、最初から死刑にしようとするユダヤ人たちに「私は、あの人に罪を認めません」と言った。ピラトは釈放しようとして、毎年過ぎ越しの祭りに一人の者を釈放することになっているが、この「ユダヤ人の王」を釈放してやろうか、と一案を持ち出す。しかし、彼らは強盗のバラバを釈放するように叫ぶ。
- * ピラトはイエスをとらえて鞭打ちにし、兵士たちはイエスに茨の冠をかぶらせ、王の服である紫色の服を着せて嘲笑し、顔を平手でなぐったりした。ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということを、あなたがたに知らせるためです。」それでイエスは、いばらの冠と紫色の着物を着けて、出て来られた。するとピラトは彼らに「さあ、この人です」と言った。(ヨハネ19:4~5)「さあ、この人です」は「見よ、この人を」という意味で、こんなみじめな姿の人があなたがたの王なのか、そんなはずがないだろう、というニュアンス。ピラトは再びイエスに何の罪をも見いだせないことを表明する。
- * 祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」ユダヤ人たちは彼に答えた。「私たちに律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります。」ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れた。(19:6~8)「神の子」ということばがピラトをビクッとさせる。ローマの皇帝も「神の子」と呼ばれていたからである。そこで、イエスに、あなたは、本当は何者なのかを問いたです。イエスは、わたしをあなたに引き渡したユダヤ人の方が罪が深いという。「こういうわけで、ピラトはイエスを釈放しようと努力した。しかし、ユダヤ人たちは激しく叫んで言った。「もしこの人を釈放するなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、カイザルにそむくのです。」そこでピラトは、これらのことばを聞いたとき、イエスを外に引き出し、敷石(ヘブル語ではガバタ)と呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。(19:12~13)「カイザル(ローマ皇帝)に背く」ということばは決定的な力を持っていた。ユダヤ人たちは、「カイザルの他には、私たちの王はありません」と自分を偽るようなことばまで言って、イエスを十字架につけようとした。とうとうピラトは決心をした。
- * ピラトは3回もイエスには何の罪もないと主張し、釈放しようとしたが、できなかった。それは、ローマ皇帝にたいする自分の保身のためであった。ピラトの弱さである。私たちも自分の身に危険が迫ったとき、真理や正義を犠牲にしないとは限らない。しかし、ピラトの決断が十字架の実現に至って神の救いの計画が成ったことを思う時、ポンテオ・ピラトと言う名は私たちの救いと直結していることを覚えたい。